Ⅴ　実施の効果

１．子どもの変化

１）松原第七中校区

①効果検証の方法

私たちが人間関係学科の実施において大切にしてきたことは、子どもたちの「気づき」と「ふりかえり」であり、その「わかちあい」である。毎回の人間関係学科の授業後に子どもたちが書いた「ふりかえりシート」から、子どもたちの「気づき」をひろいあげ、「わかちあい」として子どもたちの中に共有化してきた。また、授業そのものに対しての子どもたちの評価をデータ集積し、授業の内容づくりや子どもたちの状況分析に活用している。

また、各学期末には学校生活調査・学校生活アンケートを実施し、子どもたちの状況や学校生活にどのような変化があらわれているかを確認している。

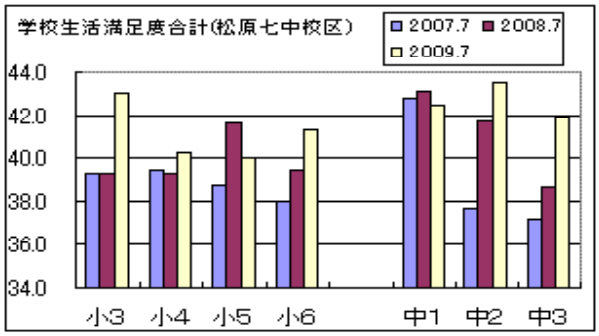
昨年度、各校の効果検証の取組は基礎データづくりに重点を置いてきた。蓄積している基礎データは、[1]「あてはまる」「あてはまらない」の率の推移、[2]得点推移の２種類である。この２種類のグラフをベースにしながら、統計ソフトなどを活用し、子どもたちの変化を追っていった。

今回の効果の検証においては、学校生活調査・学校生活アンケート、学校教育自己診断などの調査結果をもとに、子どもたちの変化から効果を検証するとともに、子どもたちの集団という意味でのそれぞれの学年という観点で見た効果を検証していきたい。

②小学校～中学校の得点推移

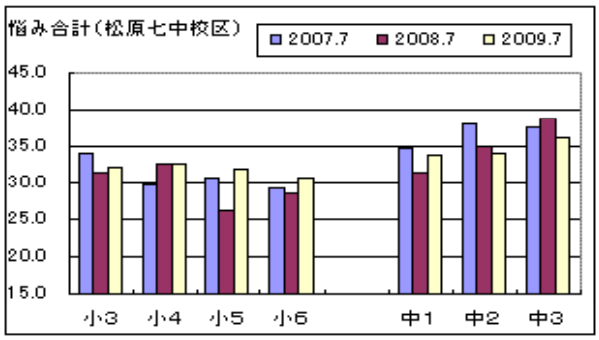
平成１９年度一学期より、松原七中校区として学校生活調査・学校生活アンケートのデータを集積し、校区としての効果測定に取り組んでいる。アンケートの項目内容や項目数には小学校と中学校の内容には発達段階に応じた若干のちがいはあるが、校区として同じ目的で同じ時期にアンケート調査に取り組んでいることに意味がある。小学校・中学校のちがいは何なのか。感覚的には、述べることはできても、本当のところどうなのか、ということに関しては、自信をもって語ることができなかったのが現実である。今回の研究開発学校の指定を松原七中校区で受けたことにより、共通の尺度の基礎データの作成が可能になり、比較はもとより、効果測定の結果も共有が可能となった。小学校・中学校の比較データの蓄積が浅いため、本質的な部分が見えるまでには時間がかかるのであろうが、そこから見えてくることからの課題提起は小学校・中学校の相互理解と壁をとりはらっていく上で、極めて重要なものであると思われる。今回は、主な項目に絞ったデータ比較から見えてくることを検証していきたい。

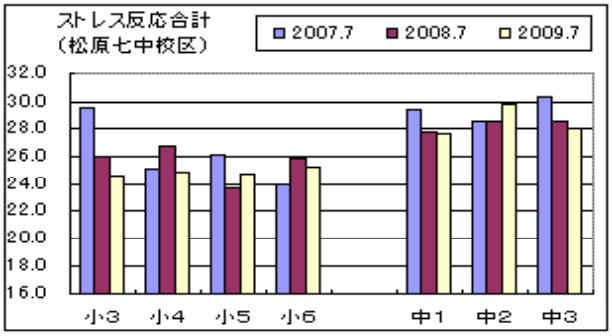
比較にあたっては､同時期の調査ということで、平成１９年度７月調査と平成２０年度７月調査平成２１年度７月調査の３回の調査結果を抽出した。



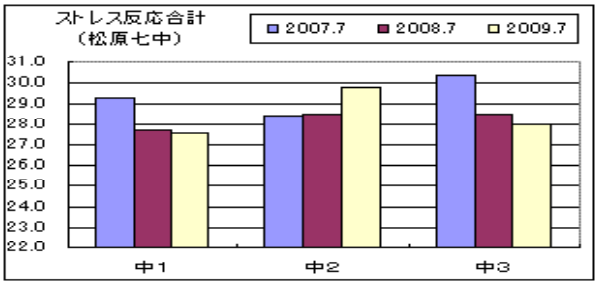
まず、調査方法についてであるが、小学校は４件法、中学校は５件法でおこなっている。この比較に際しては４件法から５件法への換算を行い、５件法の数値に合わせていることをお断りしておきたい。

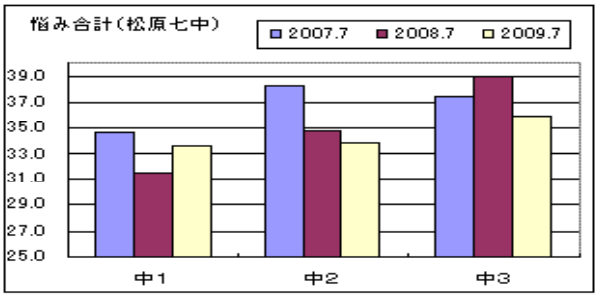
学校生活満足度の合計得点についてである｡「あてはまる・あてはまらない」の率の推移を見たとき、「あてはまる」は小学校では８０％超、中学校では７０％前半（５件法には「どちらともいえない」という項目がある）というのが現在のスタンダードな割合である。平成２１年度においては小学校、中学校ともに高い数値になっていることに注目できる。教員と子ども、子どもと子どもの関係性が人間関係学科の成果として高まっているのであろう。平成１９年度、平成２０年度のデータからは、小６と中１の間に、学校生活満足度における明らかな段差があったのであるが、小中コラボ授業などの段差をなくす取組の成果として、平成２１年度の数値においては段差はうまってきていると言える。



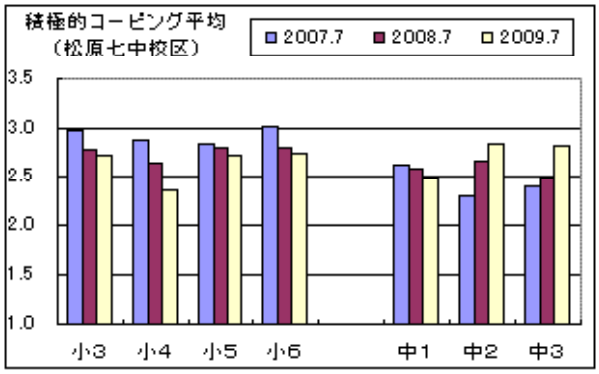


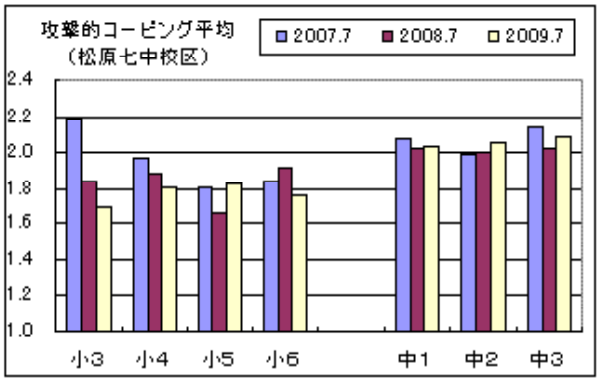
ストレス反応と悩み合計についてであるが、（ストレス反応とは「c1 とても疲れている」「c13 イライラする」などの身体や心にあらわれる反応を得点化したものである。）一目見て、小学校では学年が上がるにつれて、ストレス反応と悩みが減少し、中学校では学年が上がるにつれて増加しているということである。小学校においては人間関係的なものが影響し、中学校では進路選択などの個人的なものがあるのかもしれない。悩みの増減とストレス反応の増減には相関があることは、これまでの調査からも明らかになっているところである。つまり、悩みが多ければ、ストレス反応も多くなる。これは、小学校・中学校ともに言えることなのであるが、このように、小・中とデータを並べてみるとあることに気づく。それは、小学校と中学校における悩みとストレス反応との増加の割合である。小学校においては、平成１９年度の小３の部分を除いて、大きな特徴は見られないのであるが、中学校においては、明らかに違った部分が見られる。中学校のデータを拡大したものが下のグラフである。





悩みは段階的に上がっているのに対して、ストレス反応はそうとも言えないということがわかる。生理学的な成長過程における要素があるのかもしれないが、悩みと比較して見るならば、小学校では、ストレス反応と悩み合計がほぼ同じ変化を見せているのに対し、中学校では学年が上がるごとの悩みの増加に対し、ストレス反応は上昇していない。おそらく、この点が人間関係学科の積み重ねの成果ではないかと思われる。すなわち、長年の人間関係学科の取組により、松原七中の子どもたちは、しっかりとコーピングしていることを表しているのであろう。





コーピングとはストレス対処のことである。積極的コーピング、攻撃的コーピングの双方において、小学校と中学校の間にちがいがあることがわかる。積極的コーピングは小学校が高い。積極的コーピングの質問は（「d1 スポーツをする」「d2 友だちと話す」「d3 家族に話す」「d4 先生に話す」－小学校バージョンの質問）の４項目である。そのうち、家族・先生という大人と相談するという項目が４項目中２項目ある。結果から見れば、小学校では「大人に依存している」子どもたちの姿がうかがえる。中学校では「大人離れ－自立」していく姿が見えてくる。次に、攻撃的コーピング（「d5 物にあたる」「d6 人のいやがることを言う」「d7 人をたたく」－小学校バージョンの質問）であるが、明らかに中学校が高いことがわかる。中学校は小学校よりも、子どもの表現のしかたが「厳しい状況」になってしまう傾向にある（つまり、「荒れ」たりする）ことが、この数値から読み取れるのではないだろうか。

２）松原第七中学校

①学校生活調査より

ａ）いじめに関連する項目から見えること

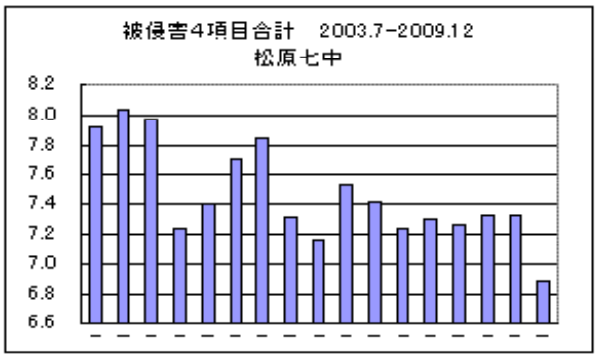
平成１５年度から平成２０年度まで、平成１８年度の若干の落ち込みはあったものの、学校生活満足度合計（合計５０点）は年々増え続け、調査開始から本年３月までの間、およそ７ポイント以上の上昇を見せている。本年７月調査がこれまでの最高値となっており、上昇傾向にあると言える。

その上昇理由の原因は、いくつか考えられる。その中でも、「まわりからの行為」ということでピア・プレッシャーの観点から考えていくことにする。

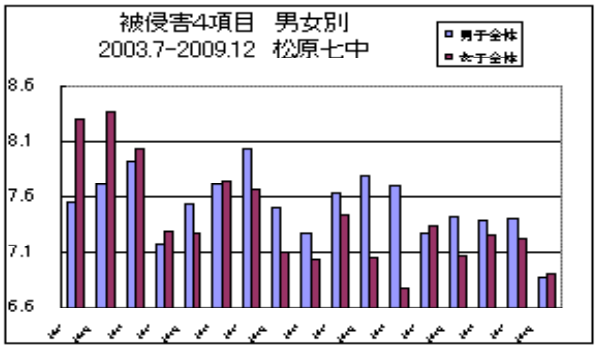
そこで、学校生活調査の中の、

b4　無視される
b5　いやなことを言われる（される）
b6　仲間はずれにされる
e17　人からの陰口、うわさ話をされること

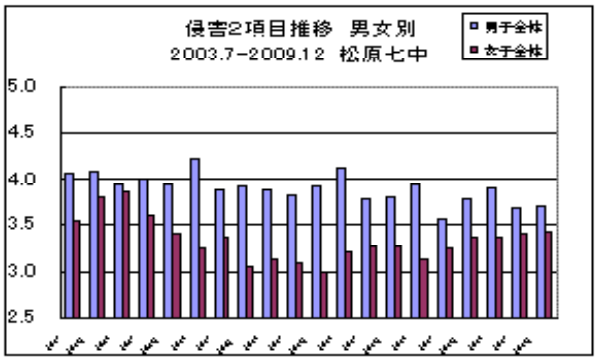
という４つの項目を拾い出し、合計点（合計２１点）を被侵害得点として、平成１５年度からの経緯を見ると、本年度まで徐々に減少していることがわかった。生徒指導部会や学年会議の中での事例検討を通じても、近年では、子どもたちの中で突発的・単発的な事例は発生しているが、継続的・深刻的な事例には至らずにすんでいる。学校生



活調査やふりかえりシートなどのアンケートにより、子どもの変化をいち早くキャッチし、それを教員間の共通認識にまで高め、いじめをする側・される側の双方に、複数の支援を様々な角度から迅速に行ってきた。その結果が、現在の松原七中の現状をつくり出していると言える。また、いじめに関わらず、子どもたちのトラブルや悩みに常にアンテナを張り、必要に応じて適切な支援を供給し、子どもたちとの相談活動を展開している。それに加え、それぞれのアンケート調査によって、子どもたちと教職員とがつながり、様々な問題の抑止力となっているとも言える。そんな人間関係学科を真ん中に据えた学校づくりの成果として、これら４項目における変化があるのではないだろうか。



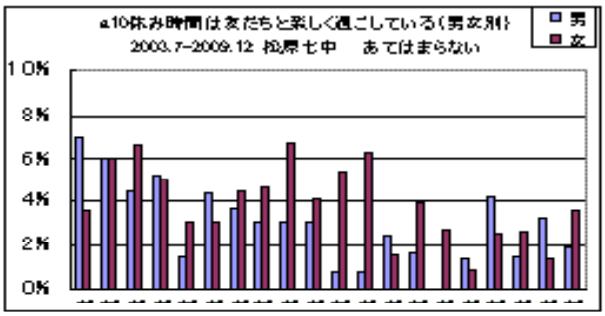
これを男女別のデータに分けてみると、男子の変化の割合に対して女子の変化の割合が大きいことに気づく。女子の数値は平成１８年度まで減り続け、一時は男子に比べてかなり低い時期もあったが、直近３回の調査においては、ほぼ同じ得点にまで落ち着いてきた。この女子の変化の割合が大きいことについては、特に女子の小グループ化という特徴に対して、自己開示を中心にした人間関係学科の成果であると言える。



さらに、「侵害する」という観点で推移を調べていくと、学校生活調査のストレス対処の項目の中にある

d6　人が嫌がることを言う　　d7　人をたたく

という項目を合計（合計１０点）して、侵害得点と位置づけてみた。するとこれも、女子の変化の割合に対する男子の変化の割合の低さに気づく。「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人をたたく」という行為は、「関係性の行為」である。これらの行為は、試し行為などとしても望ましい表現を取ることができない中に根強く存在しているのかもしれない。

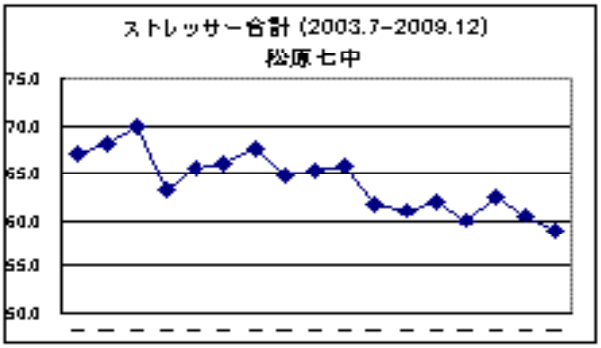


そこで、子どもたちの関係性の積極面を見れるかもしれないということで、「a10 休み時間は友だちと楽しく過ごしている」の項目を調べてみた。その中の「あてはまらない」の回答を見ると、男子においては順調に減少し、平成２０年度３月調査では０％という驚くべき数値が出ている。遊びや会話を通じた良好な関係性の構築に、いじめに対する有効性を見いだすことができるのかもしれない。一方女子においての課題は、女子がつくりがちな閉鎖的な小グループに対してどれだけ風穴を開け、風通しのよい集団にしていくか、ということがあげられる。松原七中の人間関係学科の主要なターゲットスキルは「自己信頼」「共感性」「コミュニケーション力」「対人関係」である。年度や学期の節々には、「わたしのじゃがいも」「さいころトーキング」「コロコロトーキング」「ルーレットトーキング」「すごろくトーキング」などの自己開示のプログラムを実施している。その積み重ねが女子の小グループ集団どうしに風穴を開けているのであろう。

いじめの未然防止に関わる有効なスキルは、自己認識を広げ共感性を高めることであると言われている。いじめ問題の解決にあたって常に課題となることが「人の気持ちがわかる」ということである。共感性〔＝人の気持ちを想像できる（ＷＨＯライフスキルの解説より）〕をさらに育てていくことが、いじめ未然防止の鍵になるのであろう。

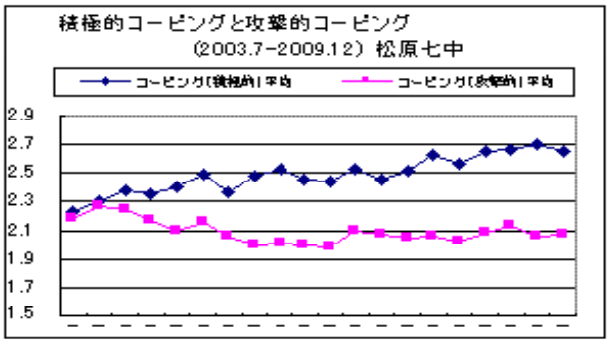
ｂ）ストレス反応とコーピング（対処）

次のグラフは、学校生活調査の e の項目であるストレスの原因となるストレッサーを測定（２４項目合計１４４点）したものである。（質問：悩



んだりイライラしたことがこの一ヶ月間にあったかどうか答えて下さい。例「e1 自分や家族の将来のこと」）学校楽しさ度が増してくると、ストレスの原因となるストレッサーが減少してくることは容易に理解できる。そして、その最大値から最小値までの差はおよそ１０ポイントとなっている。ストレッサーそのものが減少しているのであるから、そこから派生する子どもたちの攻撃的なストレス対処が減少していくことも当然のことである。人間関係学科等の成果により、子どもどうし、あるいは子どもと教員の関係性が深まり、相談活動が活発化してくる。学校生活調査の中では、このコーピングを「積極的」「攻撃的」「抱え込み」「本能的」の４つの観点で調査をしているが、ここでは「積極的」「攻撃的」の２点に絞って見てみる。項目数が異なるため平均値を算出してグラフに表してみた。（最低値１点、最大値５点）

積極的コーピング
d1 スポーツで発散する　d2 友だちに相談する
d3 家族に相談する　d4 先生に相談する
攻撃的コーピング
d5 モノにあたる　d6 人が嫌がることを言う
d7　人をたたく



積極的コーピングと攻撃的コーピングの差（＝積極的－攻撃的）としての推移を表したものが前の表である。ほぼ差のない状態からのスタートであったが、現在では、ほぼ０．６ポイントの差となっていることがわかる。５件法（１点～５点と

いう４ポイントの中での変化）での測定であるので、この差は大きいと言える。この差を広げていくことが、いじめ・不登校の未然防止につながっていくことはまちがいがない。

ｃ）「d10 学校を休む」子と教員の相談活動

「Ⅳ 研究開発の内容」の項目を書いていた時に、イライラしたときに「d10 学校を休む」子とはどういう子どもなのか、ということが疑問になり、登校回避感情という位置づけで「d10 学校を休む」という項目と全ての領域、質問との相関を調べた。統計ソフトの計算結果に＊（相関があるという印）がついた項目を見ていると、「d4 先生に相談する」という項目に＊がついているのを発見した。少々、驚きと感動を覚えながら「そうか、登校回避感情をもつ子は、先生に相談するのか。」と。でもこれは研究開発の成果かも知れないと直感して、平成１５年７月からの相関を全て調べてみた。それが、下の表である。参考までに、この質問に対して、「３．どちらとも言えない」「４．あてはまる」「５．かなりあてはまる」と答えた子どもの
全体に占める割合をつけ加えている。

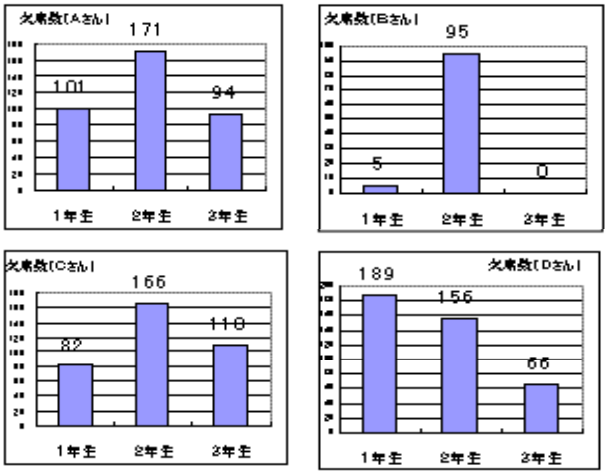
実　施	Pearson の相関係数	３４５の割合
① 2003. 7	0.026	16.7 %
② 2003.12	0.240 ＊＊	8.1 %
③ 2004. 3	0.118	10.8 %
④ 2004. 7	0.103	10.7 %
⑤ 2004.12	0.119	8.5 %
⑥ 2005. 3	0.114	15.0 %
⑦ 2005. 7	0.189 ＊＊	12.7 %
⑧ 2005.12	0.087	8.8 %
⑨ 2006. 3	0.227 ＊＊	10.9 %
⑩ 2006. 7	0.143 ＊	8.4 %
⑪ 2006.12	0.106	11.0 %
⑫ 2007. 3	0.025	13.3 %
⑬ 2007. 7	0.096	9.2 %
⑭ 2007.12	0.245 ＊＊	11.0 %
⑮ 2008. 3	0.096	13.3 %
⑯ 2008. 7	0.182 ＊＊	10.2 %
⑰ 2008.12	0.338 ＊＊	12.7 %
⑱ 2009. 3	0.181 ＊＊	11.2 %
⑲ 2009. 7	0.247 ＊＊	7.7 %
⑳ 2009.12	0.139 ＊	9.0 %

＊相関係数は５％水準で有意（両側）です。
＊＊相関係数は１％水準で有意（両側）です。

この表からわかることは、登校回避感情を持つ子が、「先生に相談する」という感じ方をいかにもっているかということである。平成１５年から平成１７年にかけての研究開発の時期は、９回の調査の中で、３回の相関がまばらに見られる。平成２０年３月の調査までは同じような相関の出現割合であるが、平成２０年７月調査より、５回連続して相関が見られる。教員の側からすると、登校回避感情をもつ子に課題意識をもち、相談活動を意識的に取り組んできているということである。結果として、登校回避感情をもつ子は、教員に相談しているという感覚をもってきた、ということが実際のことであろう。「ほっとアンケート」を材料にして取り組んでいる教育相談をベースにして、学校生活調査の結果からの速報をもとに、子どもたちの微妙な変化を感じ取れる力を教員がつけているということのあらわれである。

②不登校等の学校復帰と未然防止

「研究開発の内容」においてあらわしたように、松原七中の不登校生の率は、平成１３年度には６％を越えていたものが、平成１５年度からの研究開発の取組で、減少をし続けている。平成２１年度は暫定的ではあるが（１学期で１０日以上の欠席）２％を切る割合になっている。これは、人間関係学科や教育相談の充実の結果により、不登校生等の未然防止が進んできていることのあらわれである。平成２０年度の卒業生の不登校生等への支援結果より、１・２年生において、いったん不登校の状態に突入しても、３年生においては一定の学校復帰を実現してきた。不登校生等支援会議を中心にした継続した複数の支援のもと、もっとも効果のあるチーム支援を追求してきた結果であると言える。校内でのアセスメントと支援策の情報共有はもちろんのこと、関係諸機関との連携もイニシアティブをもって進めてきた結果である。



これらのグラフは、卒業生の欠席数であるが、４人ともに１年及び２年の欠席数を３年時においては下回る欠席数になっている。現３年生にも、４人のチーム支援が必要な子どもが在籍しているが、学校復帰だけではなく、卒業後の進路選択に対しても適切なアセスメントを行い、将来社会で自立し、社会へ貢献できる人間へと育っていって欲しいという思いをもとに、毎日の支援に取り組んでいる。

③２６期生（現１年生）について

毎年、入学前の３月に学校生活アンケートを実施しているが、その中のそれぞれの項目（学校生活満足度・悩み・ストレス反応・自己肯定感）の相関関係を分析した。それが、次の表である。

Pearson の相関係数

	学校生活満足度	悩み	ストレス反応	自己肯定感
学校生活満足度		-.481(**)	-.265(**)	.286(**)
悩み			.691(**)	-.598(**)
ストレス反応				-.473(**)
自己肯定感				

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

どの関係も強い相関関係にあり、子どもたちにとって「学校生活満足度」が大きな影響を持つことが読み取れる。また、「悩み」の内容を調べると、「b1.勉強が分からない」と「b3.友だちとトラブルがある（多い）」が特に多い項目となっている。そこで、今年度当初の１年生のＨＲＳは、特にグループエクササイズを重点的に行い、友だちとコミュニケーションをとったり、協力したりする機会を多く取ることにした。また、イライラを「モノにあたる」「人が嫌がることを言う」という攻撃的な方法で出している子どもたちが目立ったので、２学期からはストレスに関する学習も進めてきた。

a)ふりかえりシートより

＊「わたしのジャガイモ」をして、伝えるってすごく大切やなぁと思った。友だちとの関係もこうやって深めたいと思った。

＊「さいころトーキング」をして、班の人の夢などが聞けた。班の人のことが分かって嬉しい。

＊「何でもキャッチ」をして、優しく投げることがいいと思った。投げる相手が自分のことを考えてくれたと思う。言葉も一緒だと思う。

＊「流れ星」をして、同じ情報を聞いていても、全然受け止め方が違うんだなぁと改めて感じた。ふだん、一人一人意見が違った中で、ともに過ごすって良いなぁと思った

＊「アニメの村」では、みんなで意見を出し合って考えて分かった。たぶん、1 人ではよく分からなかったと思うけど、みんなで考えたから分かったと思う

＊「サバイバルゲーム」をして、自分だけがいい思いをしようとするんじゃなく、他人のことも気づかはないといけないと思った。

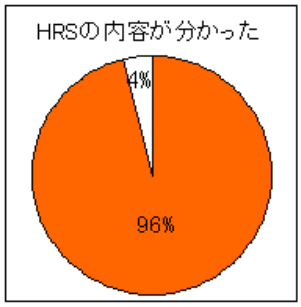
＊「スパイダーリフト」をして、何かみんなで 1 つのことをするには、みんなが相手のことを考えなければいけないということを学んだ。

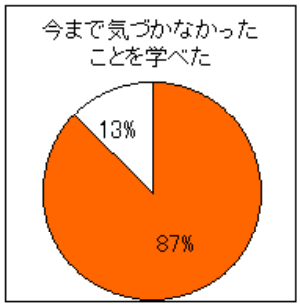
＊「スーパー新聞ジグソー」は、小学校の時の「新聞ジグソー」より難しかった！でも、みんなで協力できて楽しかった！完成して嬉しかった。

＊ストレスの学習で、ストレスにもいろいろなあって、人によって受け止め方も違うんだなぁと思った。ストレスと上手につきあいたい。

＊小中コラボをしてみて、後輩の見本になれるようにがんばる。優しく接して、中学にはやく慣れれるように教えたりしたい。

b)ＨＲＳ自己評価（２学期末）より

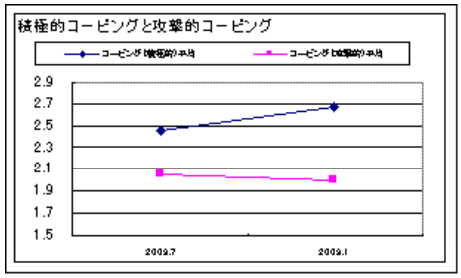




２学期末に子どもたちにとったＨＲＳ自己評価のアンケートによると、多くの子どもたちがＨＲＳの学習の中で、ＨＲＳの内容を理解し、今まで気づかなかったことを学んだと答えている。

２学期は小中コラボをはじめとするグループエクササイズと、ストレスマネジメントの学習を柱としてきたが、それが功を奏したといえる。

c)現状とこれからの課題



グループエクササイズを重視した１学期。グループエクササイズとストレスマネジメントを学習した２学期。１学期当初に比べ、友だち同士のトラブルも少しずつ減ってきている。下のグラフにもあるように、１学期と２学

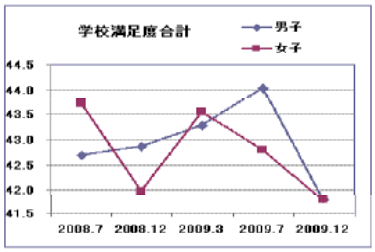
期を比べると、「モノにあたる」「人が嫌がることを言う」などの攻撃的コーピングはほぼ横ばいだが、友だちや先生に相談するなどの積極的コーピングの数値は大きく上がっている。子どもたちは、少しずつ積極的なストレスの対処法を獲得しつつある。

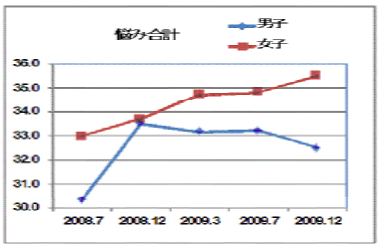
その一方で、学校生活調査の「b1. 勉強がわからない」の項目は増加しており、「わかった」と言える授業をより一層追い求めていく必要を改めて感じた。

④２５期生（現２年生）について

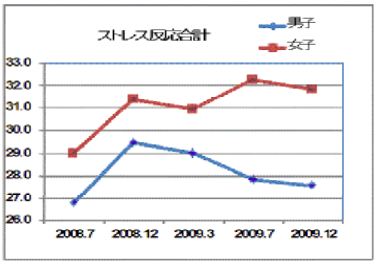
２５期生は、小学校から「人間関係学科（あいあいタイム）」に取り組んできた初めての学年である。中学校のエクササイズは、ＨＲＳが”楽しい時間”になることを心がけて実施してきた。その結果、１年２学期末のアンケートでは、「ＨＲＳを楽しんだ」と「ＨＲＳの内容が分かった」がともに 91 %、「気づかなかったことを学んだ」が 81 %に達した。中学校でのＨＲＳの取り組みが、小学校の『あいあいタイム』で培ったきた“学び”を深め、さらに自分の考えを広げる機会となっていることがうかがえる。

ａ）学校生活調査から



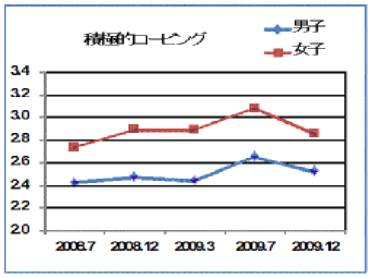


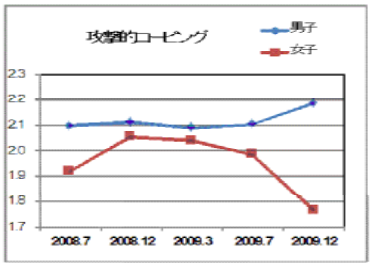
「学校生活楽しさ」の推移をみると、男女で上下の変動に大きな違いがみられるが、２年２学期で、41.8 の同じ値になっている。「悩み」と「ストレス反応」では、男子は１年の３学期以降は減少に転じているが、女子は増加を続けている。



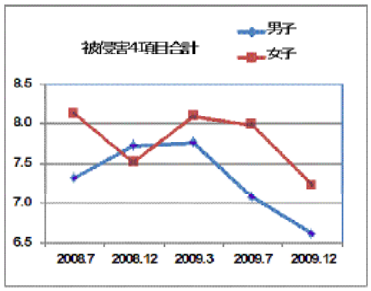
１年２学期の悩みの増加が男女共に大きいが、増加の要因をみると、「b1 勉強が分からない」と「b2 がんばっても成績があがらない」で 70 %を占めている。このときの女子の「学校楽しさ合計」はすべての項目で低下しており、『授業』（「a2 楽しみな授業がある」「a3 よく分かる授業がある」）と『先生』（「a8 楽しくておもしろい先生がいる」「a9 悩みを聞いてくれる先生がいる」）で低下理由の 51 %を占めていた。このとき、男子は、『授業』では低下しているが、『先生』もその他の項目もすべて上昇しており、これが男女の差となって表れている。

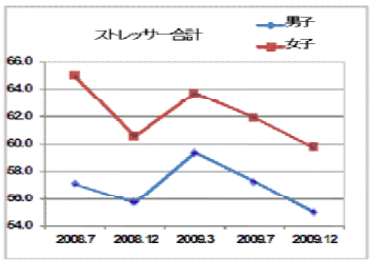
２年生２学期の男子のグラフをみると、「悩み」と「ストレス反応」は低下しているのに、「学校楽しさ合計」も大きく低下している。このとき、男子はすべての項目で低下しているが、『授業』と『先生』で低下理由の 52 %を占めている。２年の後半になって、男子も学力に対する不安が増大してきたことの反映と考えられる。





ストレスに対すコーピングをみると、積極的コーピングは女子の方が高く、男女ともほぼ同じ推移をしている。攻撃的コーピングは男子が高く横ばいから、２年２学期には上昇に転じている。一方、女子は１年の２学期で上昇したが、３学期以降は減少しており、男子とは逆に、２年２学期の低下が大きい。「悩み」と「ストレス反応」が増加している女子が、積極的コーピングで対処できており、攻撃的コーピングが減っているのは、明らかにＨＲＳの成果といえる。





被侵害４項目（「b4 無視される」「b5 いやなことを言われる（される）」「b6 仲間はずれにされる」「e17 人から陰口、うわさ話をされる」）の合計とストレッサー（e の項目すべて）の合計の推移をみると、男女ともほぼ同じ推移をしており、特に、２年生での減少が

大きい。これらは２年１・２学期の取り組みの成果として評価できる。

ｂ）２年１・２学期の「ふりかえりシート」より

＊アイウエオ自己アピール
・みんなの話を聞いて、そうなんやなあと思ったことがたくさんあった。
・自分のことをめっちゃほめるって難しいなあって思った。

＊ソーシャルスキルアンケート
・気づかない自分が見えて自分を変えていこうと思った。
・今までの自分の行いを改めて振り返ることができた。

＊スーパーすごろくトーキング
・話してみないとわからないことっていっぱいあるねんなあって思った。
・言うのにちょっと勇気がいるけどみんながそれに反応してくれたからうれしい。

＊ On The desk
・何事も集中してやらないと成功しないと言うことがわかった。
・覚えたつもりじゃなくて、ちゃんと覚える事が大事やなぁって思った。

＊伝達ゲーム
・一方的だと、伝えたいことも伝えられないということがわかった。
・難しくなるほど聞く側も伝える側も気持ちが変わっていくけど、分かったときはすごく気持ち良かった。

＊『あいうえお』ロールプレイ
・同じ「あいうえお」でも、表情や態度がちがうだけで、とてもちがうように感じた。
・言葉で優しく言っても、表情とかで相手が勘ちがいしたりしてしまうから、どっちも大切だと思った。

＊スパイダーフライヤー
・気持ちを１つにしやなでけへんなぁ～って思った
・むっちゃ難しかったけど、出来たらむ～ちゃ達成感があってよかった。

＊どう答えたらええんやろ
・どんな言い方されたらうれしいかなって考えた。
・相手にイヤな想いをさせないでちゃんと言いたいことは言えるように考えた。

＊もめごと解決
・もめごとも、みんなで知恵を出し合って何とかすれば解決できるんだなあと思いました。
・どうやったら解決できるセリフになるのかとても悩んだ。ふだんはとくに考えやんと人にものを言ってるときがあるけど考えるとむずかしい。

＊すごろくトーキング＆ドゥーイング
・話すとき、班のみんながちゃんと顔見ててくれて、いいなって思った。
・やっぱり普通の自己紹介より、他の人のことが、よくわかった。

＊選ぶってどういうこと？
・「選ぶ」ということは何かを「捨てる」ということなんだということが分かった。
・ 捨てることを考えたら悲しかった。理想か現実か悩んだけど、理想を選んだ。

＊見て！聞いて！伝えて！
・ジェスチャーだけで伝わるんや！ほとんどの班が正解していた。
・表現してみんなに伝える事って難しいなあと思った。だから、普段自分が気づかないだけで、誰かが困っていたり何かを伝えたくてサインをだしているかもしれないからそれに早く気づけるような人になりたい。

＊パにくるゲーム
・無関心にされるほうが集中できたけど、悲しい。
・焦らされたり、励まされたりして、それぞれ気持ちがちがった。状況で使い分けられたいいなー。

＊マイコントロール
・自分も家とかでいろいろなコトがあって、気持ちがめちゃくちゃになり、いろんなコトを考えたりします。そんなコトを落ち着かせるため、今日のコトをためしてみたいと思います。
・どんな時でも緊張するときって絶対あると思うけど、それだけ成功したいとか、良い結果で終わりたいと思う気持ちが強いんだと思う。もし誰かが緊張してたら声をかけてあげたいと思う。

＊みんなでつくろうあったかいわ
・みんなのチームワークが大切だなあと思った。誰か一人でも欠けたら上手くいかないからむずかしいなあと思った。
・みんなで協力すれば何でもできると思った。

ｃ）今後の課題

ＨＲＳによって、子どもたちの人間関係がよくなり、ストレス対処にも良好な結果が表れている。ただ、学年が進むにつれ、子どもたちは、ＨＲＳ

が”楽しい時間”だけでなく、もっと考え、新しい気づきをもっと得られる時間になることをのぞむようになってきている。相手の立場に立ってものごとを考えたり、価値観の相違を知ること、また、自分自身への肯定感などを、さらに深めていく取り組みが必要である。

また、ＨＲＳによってストレス対処がよくなっている現状に甘んじることなく、悩みの増えた最大の理由が「勉強がわからない・成績が上がらない」ことであることを直視し、すべての教科で、楽しくてわかりやすい授業を創造し、確かな学力をつける努力をしなければならない。

⑤２４期生（現３年生）について

ａ）ふり返りシートより（２学期実施１０時間）

－体育大会を前にしたＨＲＳ－

＊松七フレンドパーク

・すごい楽しかった。体育大会前に班の絆が深まって嬉しかった。

－「社会に通用するスキルを学ぼう」ＨＲＳ－

＊４つのマトリックス

・自分の行動を４つのマトリックスに表してみて、自分の行動がよく分かった。自分を成長させられるように第２領域を増やしたい。

－ステップアップマナーＨＲＳ－

＊テストにだってスキルは必要

・自分がテストをしているところを見てみてびっくりした。相手から見た見方が分かった

＊ロールプレイで面接練習

・あと何ヶ月かしたら自分もこんな風にするんだろうなと思ったらすごく緊張したし、どのようにすればいいか分かってすごく勉強になった。

－進路に関するＨＲＳ－

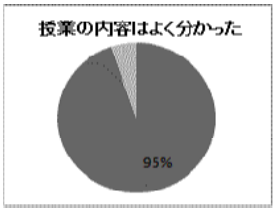
＊私のストレス対処法

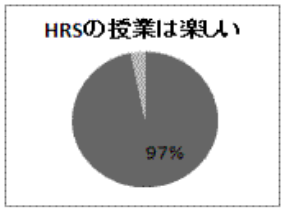
・クラスの子のストレス対処法を知って「そんな対処法があるんだ！」と知って自分も試してみようと思った。

＊見方を変えれば世界は広がる

・見る場所と言うか角度を変えてみると全然ちがう物が見えてきたり捉えられたりして、見方を変えるって大切やな～と思った。

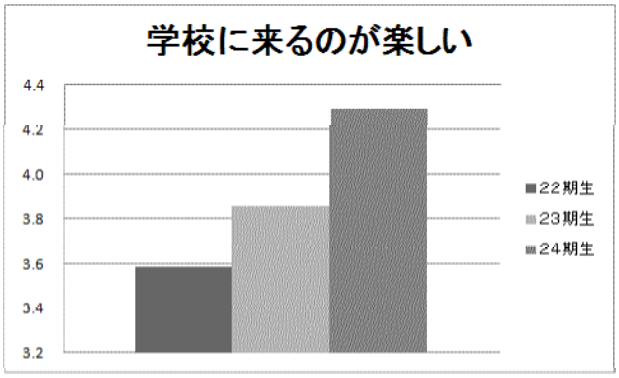
ｂ）ＨＲＳ自己評価より

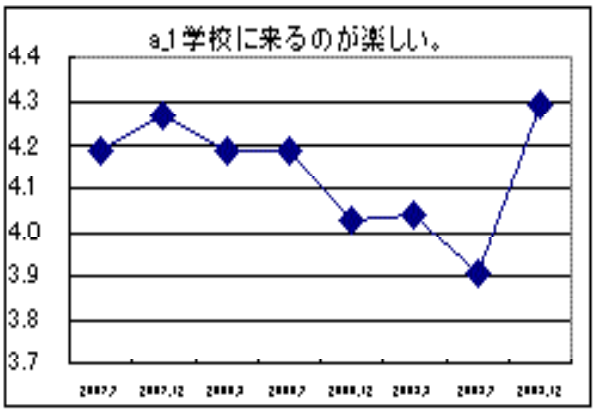




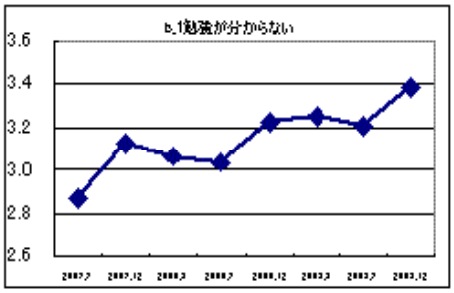
研究報告最終発表会紀要での表記と同様に、今回の自己評価でも３年生の約９０％の子どもたちが「ＨＲＳはよくわかる」「楽しい」と感じており、その数値は高くなってきている。

ｃ）学校生活調査などから見えてくる変化

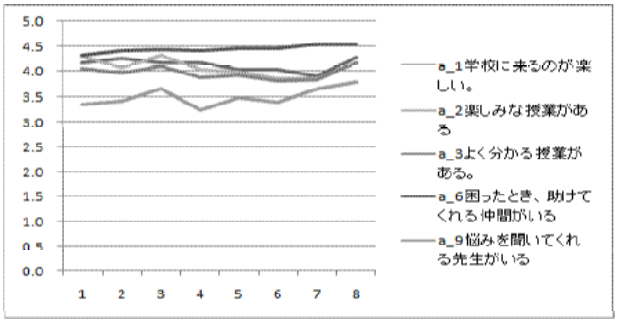




２４期生（現３年生９９名）の２学期末の学校生活調査の学校生活満足度（学校に来るのが楽しい）を見ると、これまで例年とほぼ同じの数値だったのが、２学期に急増している。主な上昇した項目に「楽しみな授業がある」「よく分かる授業がある」がある。進路選択を前に学習に関する項目に上昇が見られる。しかし、子どもたちの悩みについて「悩み合計」が減少している訳ではない。特に、「勉強が分からない」などの項目は横ばい状態である。学校生活満足度の内、上に述べた項目以外に「悩みを相談できる先生がいる」「困っているとき助けてくれる仲間がいる」という項目が増加している。これまで学習に対して消極的だった生徒の学習への意識が高まったことと、その相談活動（子どもと子ども間・子どもと教員間）で行われてきたからだと考える。３年生で実施した「ほっとアンケート」での

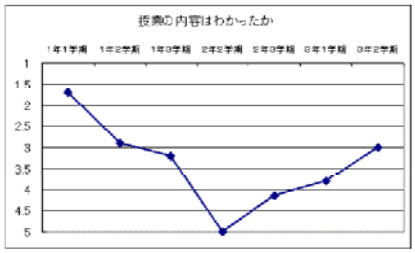


学年の子どもたちの様子を見てみると、１学期に比べ、承認度が増加している。学年全体としての相談活動の成果だと考える。



d）今後の課題

この学年の子どもたちは小学生の時、試験的にＨＲＳを実施し、中学生になってから３年間ＨＲＳを実施してきた学年である。ＨＲＳの授業の最後には必ず「ふりかえり」を行っており、授業についてのアンケート（ふり返りシート）を取っている。今回、３年間の全授業のふり返りシートを調べてみると気になる子どもの変化が見えてきた。『ＨＲＳ自己評価より』でも述べたように、全体としては「よく分かった」「楽しい」と捉えられているＨＲＳだが、ごく少人数ではあるが数人の子どもたちは「全くそう思わない」と答えている。この子どもたちは毎年２回実施している「ほっとアンケート」などでも、満足群にプロットされていない子どもたちと一致する。１年生の時高かった数値が２年生で減少し、２年生ではほぼ全ての授業に否定的なふりかえりをしている（トーキングゲームを除く）が、３年生ではまた上昇している。２年生は中学３年間の中でも揺れの大きな時期ではあるが、この時期にどのような取り組みやＨＲＳを実施するかが大きな鍵になるように思う。１年生での数値までの回復はなかったが、中学３年間の間に揺れを乗り越え、意味のちがった数値に変化しているのではないかと考える。数値で成果を表すことは、１人ひとりの子どもに対する支援を考える上でも効果的であった。教員の感覚とＨＲＳのふり返りシート、

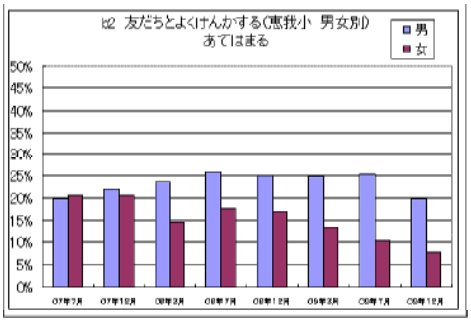


そして学校生活調査など複数の角度から子どもたちを見、子どもたちの状況から新たに人間関係学科を進めていくことの必要性を改めて考えていきたい。

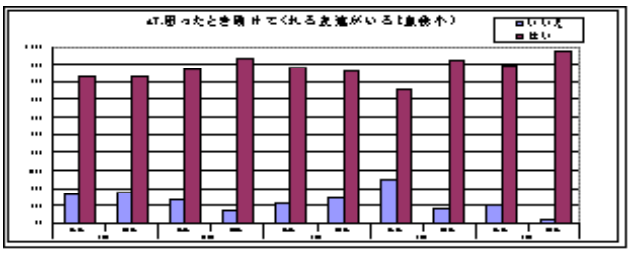
３）恵我小学校

①学校生活調査から

ａ）子どもどうしの関係

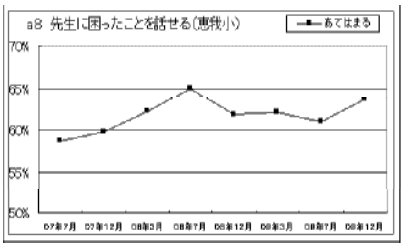


このグラフは「b2 友だちとよくけんかする」と答えた子どもの率の推移を表したグラフである。このグラフを見ると、男子はほぼ同じ様子で推移しているが、女子については取り組み後その数値はほぼ半減している。女子の人間関係の難しさが指摘される中で、この取組の効果が女子に顕著に現れている。また今年度１２月に実施した調査の「a7 困ったときに助けてくれる友だちがいる」という項目の学年別の結果をみるとなかでも高学年になっていくにしたがって、その率は高くなっている。



このことから、「あいあいタイム」をはじめとした取り組みが浸透し、子どもたちは友だちとの関係がより深化したものになっているという自信を持てている様子がうかがえる。

ｂ）教師と子どもの関係



このグラフは「a8 先生に困ったことを話せる」と答えた子どもの率の推移である。こちらもアンケートの実施ごとにあてはまると答えた子どもの率は増えており、教師と子どもとの良好な関係が築けていることがうかがえる。